

があり、従つてその部は後世の補筆と知るべく、この補紙より右に女の前額部

(原 寸)

を切る一線と、男の腹部より下へ敷莫蘆の端に及ぶ一線の大きな斷爛を認める。但しこの部分には補彩なきものゝ如く、全面蠹蝕多く、その最も甚しき部分には多少筆を入れた形迹を認め得るがかくの如き小疵は敢て畫品を傷けるに足らず、些か畫面の荒れたるを惜むも、清雅掬すべく、畫裡萬斛の涼を盛る一佳品と言ふべきである。

久隅守景は神足常庵、桃田柳榮、緒方伸由等と相並んで探幽門下の四天王と謳はれた逸足であり、畫名天下に藉甚し、時にその畫品は探幽の上にあるとさへ評された事は三曉庵主談話によりて知る事が出来る。又古畫備考に従へば夙く探信門下の吉田某の如き、守景の偽作を製して市に鬻いだと傳へられ、以てその畫の如何に當時より寶重され來つたかを察知する事が出来る。しかもその畫蹟多からざるに非ず、その畫品清高ならざるに非ず、我が近古畫史の上に重要な一項を占むべき此畫人の傳記は杳として詳にし難い。生地歿年共に知り難く、行實の如きも一時加賀に住した事ある由を傳ふるのみである。在世年代も固より確知し得ないが、古畫備考に引ける木挽町公用帳に載せたる元祿四年狩野三家連署の願書を信用すれば、元祿四年より二十年以前に已にその子彦十郎が恐らくは二十歳前後に達して居たらしく思はれるからして、若し守景が人壽を全うしたものならば寛文、延寶の頃を盛りに過したと考へらるゝであらう。一説に守景蚤世とあり、又一説に七十比の行年を記した畫蹟を止めてゐるとも言はれてゐるが、管見の及ぶ限り守景の落款には本圖に署せる如く單に守景筆とのみあるものが最も多く、その行年を記した作品なるものゝ信據すべきものを知らない。従つて蚤世長壽何れとも定め難いが、その畫蹟より想像する所で

は、恰かも本圖の如き、最も渾熟せる筆致を示し、老成の風を見得る所からして、相當の壽を享けたるものと考へ得らるゝのではあるまいか。

探幽と守景との比較は興味ある問題とし得る。その畫壇に於ける勢力と、その作畫の豊富に於て、守景は固より探幽の敵ではない。探幽の多方面な畫才も亦守景の能く追隨し得る所ではない。然もその畫品に至つては如何。探幽の作畫態度には常に御用繪師としての有形無形の束縛が加へられてゐたと考へられる。探幽の作品に陳腐な畫題が多く、新奇な獨創的構圖の見難い事はこれを物語るものであらう。之に比すれば守景の作畫態度には遙かに自由な、従つて遙かに獨創的なものを見得る。例へば本圖の如き畫題も、後世に至つては復古大和繪派の諸作家等の好んで採つた題材ではあるが、當時の狩野畫系に於てかゝる純日本的な、又庶民的な題材を取扱つた事はその一端の現れとすべきであり、或は狩野派に於て屢取扱ふ耕作圖の如きにあつても、古法眼以來の諸家が好んで漢風を描く所を、守景はそこにも矢張り純日本的な優れた一風俗畫を描出してゐる。此意味に於て探幽と守景の關係は恰かも高雄觀楓圖や、花下遊樂圖を遣した古狩野末流の諸家と元信等宗家の嫡流諸家との關係に類似するものがあり、その畫品に於ても古狩野末流の作家のこれらの作品が、時に却つて宗家の大家を凌駕するものがあるが如く、守景の作品も、その上乘なるもの本圖の如きに至つては、陳々相依る探幽の凡作を擯づる事數等と評して敢て溢美ではあるまい。(正木)

## 十 下村觀山筆 天心岡倉先生像

東京美術學校藏

挂幅紙本淡彩 竪一、三八〇米 横〇、六八八米

此圖は大正十一年秋の日本美術院創立二十五週年に相當する再興第九回展に出品された「天心先生」の草稿で、之が製作されたのは同年春の事であると云ふから岡倉氏歿後(大正二年九月二十五歳で病歿)約十年後の製作であり、従つて勿論臨寫ではない。

岡倉覺三、下村觀山の名は同時に横山大観を、尙遡つて橋本雅邦、狩野芳崖、フェノロサ等の一群の美術家並びに美術批評家を想起せしめる。此一群の人々は藝術上の主義の共鳴以外相互の信頼と尊敬とに依つて心底より緊密に結束し、従つて彼等の爲した藝術運動は明治時代の美術界に明確なる足跡を印象付け得たのである。

明治十一年のフェノロサの來朝は彼にとつて新しい美の發見に對する好機を與へる事となつた。彼は古來よりの日本美術の偉大性に驚異すると同時に當時日本の美術界を風靡してゐた無氣力な文人畫と拙劣な洋畫の流行に阻まれて國畫の微々として振はざるを慨歎し、國畫獎勵に盡力し、彼の理想を具體化する

に狩野芳崖、橋本雅邦が與つて力があつた。岡倉覺三氏又フェノロサの意見に共鳴し、該博なる知識を以て日本美術の優秀なる事を賞揚し、國畫獎勵に努力し之が理論に基き新しき畫境の開拓に貢獻あつた人々に下村觀山、横山大観等があつた。此等の人々に依り明治初期に於ける萎靡沈滞の淵に臨める美術界は刷新され、明治期の日本畫の特色を形成せしめた原動力を與へた。日本に於ける國畫教育、國寶調査、美術學校設立等の組織的美術施設又は美術行政の基礎事業にも大方此一群の人々の參加した事を思へば此一群の存在は明治時代美術界に如何に大なる役割を演じたかは想像するに難くない。日本美術院の創立は岡倉覺三氏に依つて實現され、大観、觀山等其傘下にあつて新興美術の發達に

盡瘁した。

以上の様な關係から觀山畫伯は芳崖、雅邦及び岡倉氏を三恩人として三氏の肖像畫を製作し後世に遺す事を豫てより念願としてゐた。然るに芳崖の肖像は全く成らず、雅邦のは草稿風のもののみで止み、只岡倉氏の肖像のみ完成せられ大正十一年の院展に「天心先生」と題して出品し、好評を博したが、之は後辰澤延次郎氏の所藏する處となり、大正十二年の大震災の折不幸焼失の災に遭つた。茲に於て觀山氏之を惜み篋底の草稿を取出し、加筆を施し、彩色及び修飾を加へて挂幅装にしつらへて祕藏してゐたのが此草稿である。従つて之は單なる草稿ではなく完成された繪畫とも見る可く觀山謹寫とある落款の存在が尙

此事を證明して餘りあると思ふ。

（日本美術院圖錄より） 舊藏氏 辰澤延次郎 圖 天心先生

此圖が示す如く道服姿の天心先生が卷紙を前にし靜かに想を練りつゝある數刻の極めて靜寂なる境地を表現したもので、稍上目使ひの風貌は手にせる煙草から立ち昇る紫煙と共に此閑寂な境地を彌上にも強調するに役立つてゐる。此作品が品位ある作品となつてゐるのは一つには此靜寂の雰圍氣から醸し出されてゐるのではあるまいか。此圖が草稿風なものとして淡彩の線描本位である事が道服に依る高士風な風貌と相俟つて可成調子の高い藝術作品を作り出してゐる點で寧ろ完成せられた第九回展出品作よりも優作であるかに見える。

此圖に於て觀山畫伯が如何に岡倉氏の個性の表現に苦心し、風貌、習癖等を寫して遺憾なきかは岡倉氏を知る程の人に取つては一々微笑を以て首肯し得る事が出来るであらう。着用の道服は嘗て岡倉氏が渡支し道士と會見せし折與へられた道士の或階級を示めず道服と云はれ故人愛用のものである。此圖に於て岡倉氏の習癖である指先にて鬚をまさぐる點、物を書く時紙を斜斜めに置く點等微細に描出されてゐる。

此草稿を焼失せる作品に比較するに其圖柄、大さ共に殆ど同一であるが、其彩色の濃淡、配合に相違があるのと、机上の卷紙に後者には文字を認めないと云ふ點に相違を見る。此草稿に於ける文字ある部分は觀山氏所藏の岡倉氏自筆

## 内 外 彙 報

の原稿を觀山氏自身極めて巧みに切貼りしたもので、其原稿とは嘗て觀山氏が平家物語に關する繪卷物を製作せんとした時の岡倉氏の之に關する筋書であるが、此繪卷物は然し觀山氏に依つて實現せられずに終つて仕舞つた。

此圖は斯くして岡倉氏を偲ぶ好個の記念であるばかりでなく、明治以來洋畫の勃興により肖像畫の仕事をや畫に奪はれ、日本畫の肖像畫の傑作の少ない中にあつて藝術的に極めて優秀なる作品として尊重される。

### 米國に設立されたペルシア美術 及び考古學研究所

美術或は考古學の研究に於て、歐米人の東洋に關する興味と熱心とは愈々盛になりつゝあるが、殊にペルシア研究は近年一種の流行とも云ふべき程であつて、これは今迄比較的閑却されてゐた此の部分に就て、その重要さが次第に認識されて來たからであるとして見てよい。

その現れの一つとして、ニューヨーク市に設立されたペルシア美術及び考古學研究所は、その組織と、今迄の仕事のやり方から見て、いかにもアメリカらしい規模のものであるが、着々仕事を進めてゐて、將來此の方面の研究には無視することの出来ない中心勢力を形りつゝある。以下にその概要を紹介する。

The American Institute for Art and Archaeology は一九三〇年十月社團法人として設置され、その目的とする所は、ペルシア美術に關するあらゆる研究を進める爲に、學者を援助し、踏査、發掘等を行ひ、或はそれ等を他で行ふ場合に助力を與へ、展覽會や學會を内國にも國際的にも主催し、圖書、研究資料の出版を行ひ、ペルシア古蹟の保存にも貢獻しようと云ふのである。

名譽會長にジャックソン教授、理事の中にはラウフアー博士やロストフツエ

此草稿も近年ハーバート大學のフォッグ・ミュージアム(Fogg Art Museum)の東洋部長ワーナー氏(Langdon Warner)の來朝し觀山氏を訪問した折岡倉氏の恩顧を受けた縁に依つてワーナー氏に與へられて米國に渡つて行つたが、最近又ワーナー氏から米國ハーバート大學東洋部の名の下に東京美術學校へ寄贈されるに至つたものである。(尾崎)

フ教授も見え、通信員にはザル博士、ビニオン氏、サー・デニソン、ロツス氏、ストリツイゴウスキー教授などの學者を加へてゐるが、主腦となつて事業を指揮してゐるのは、アーサー・アバム・ボープ氏で、その生き生きした、且つアメリカらしい大袈裟な仕事ぶりは、既に現はれた二三の事業からでもよく分る。

一つは龐大な出版計畫で、普通の場合とは逆に、先づ綜合的な大出版を以てスタートしたのも面白い。これはペルシア美術に關するあらゆる部門に就て世界の權威者の顔觸れを描へ、現在に於ける知識を集大成したものであつて、早くから計畫は發表されてゐるが、印刷に手間どつて未だ發行の運びに至らない。今年中に出ると云ふが、ペルシア美術を見ようと思ふものには、先づ緋かなければならぬものとならう。

又創立早々の目覺しい事業は、昨年一月にロンドンで開かれた、國際的なペルシア美術展覽會と、ペルシア研究に關する國際學術大會とに、大きな力を致したことで、前者はボープ氏が總指揮者となり、後者は同氏とサー・デニソン・ロツス氏との協力で催されたものである。

近くはアメリカ各地に、ペルシア美術、文學、考古學等の諸問題に就いて公開講義を開き、半年間に五十回許りの講演を行つた。講師の中では、特にロンドンからロツス氏を招聘して連續講義を開いてゐる。